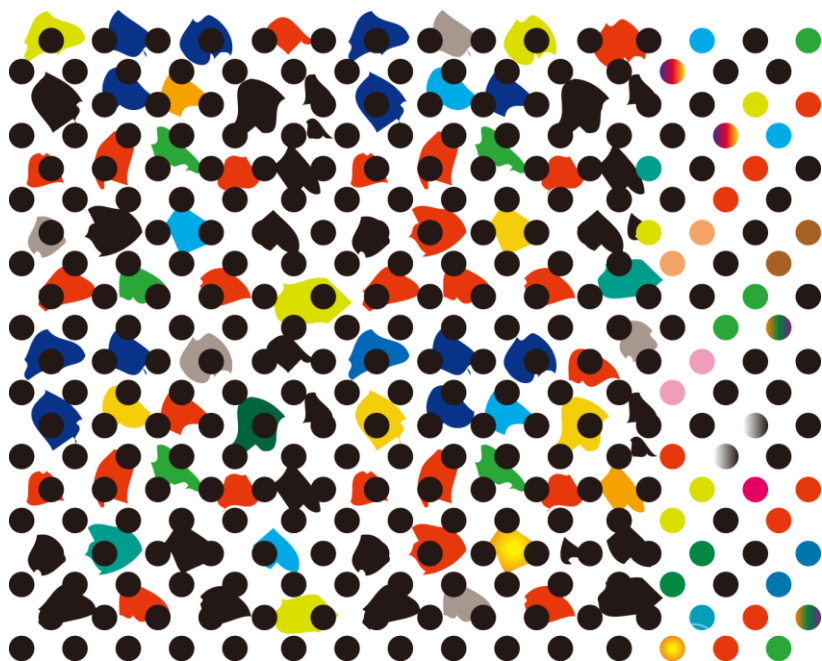


立彩

詩誌

Rissai: A Journal of Poems



第8号
2015年8月

目次

伊東友乃	ちょうちょ	1
	ゆうら ゆら	2
	よぶんな水	4
	六月の声	6
栗山佳織	煙	8
	no pasaran	11
戸張雅登	冷静と無関心のはざま	14
	人が恐竜と呼ばれる日	16
	森で人は何になるか	
	—マルグリット「光の帝国II」に寄せて	18
畑ゆめじ	濡れた記憶	20
	こうもり	22
	小さいチーズに	24
渡辺信二	寂しく笑う	26
	檸檬の裏話—もとの智恵子が語る	28
	5月2日の夜に思う	
	—茨木のり子「6月」に答えて	30
	民は人であるか	32

表紙原画	鈴木順三	表紙	「水玉な生活1」
		裏表紙	「水玉な生活2」

ちようちよ

伊東友乃

もうすぐ 二歳になる きみの ために
草なかを ひらひら

およぐ 一羽の ちようちよを

この 手のひらのなか つかまえる

ちようちよは 指のあいだの すきまから

飛びたつ と

すずやかに わらう

きみのひとみを よぎつて 風にのり

無邪気な 世界に

くすぐられた 気も したのだけれど

ひらいた 手のひらには

すこしも 鱗粉は ついていなくて

やはり わたしは

ずいぶん 器用なおとなに なっていた

ゆうら ゆら

伊東友乃

夏だから と 思いきったのはずなのに
直線的にそろえられた髪は

肩のすこしうえて

まえへ うしろへ

さだまらなく揺れて はね 揺れて はね

美容室の入った ビルを出てからも

両手で 抑えようとすると

右に 左に バランスを傾ける

電車にのったら 足もとからの揺れに

どのように 身体をゆだねていたのか

すっかり 忘れた

座っても 髪は

もう届かない 空間のなかで

ゆうら ゆら

かぶり物みたいで

わたしの いちぶ なのか
いちぶ じゃないのか
15センチ切りました と あの時言った
彼の声は 明るかったし
わたしも
にこやかに 頷いてた
ひらききった 夏のむこうがわに
ゆうら ゆら
いつまでも揺れる わたしが
流れつきそうで
流れつかない

よぶんな水

伊東友乃

つややかな 黒い池を

蛙の音が びるびる ふるわす

ここ最近 よぶんな水が 身体に溜まって
しまったので

真新しい空気を

欲して 外にでたが

もうじゅうぶん 夜に湿って

沈殿している

膝のうらがわを また 水が つるり

耳たぶを じゅるつ と

暗い道に 踏みだす 身体がまるごと

重くなる

ながい雨のせいで

色褪せた

赤児の頭ほどの 大きさの花のかたまりが

こちらを いっせいに ふりかえる
唾をのみこんで 首を

花弁の高さ

すれすれまで もちあげてみると

いっぽん 手折りたい 衝動に

つきあげられ

水が いやいよ 溜まってい

六月の声

伊東友乃

六月に 聞こえる声は

どれもくもっているので

反芻できない

雨ごしに

言葉を すくい捉えられると

人としての気配が

殻のように

うずくまって かたくなる

平淡な語彙を 忘れはて

ぬめった土ばかりを 掘りかえし

喉骨を ひとつ埋めた

(明日は どちらへ行かれるのですか)

(雑草は 引きぬいて 束にしておきました)

声 のかわりに

甘やかな 息を

つうつとひきぬいて
氾濫しかけるあの川へ

いつそ落とそうか

煙

栗山佳織

雪まじりの雨が

曇天の奥から盆地に降りつづき

十二月も始まったばかりなのに

駐車上には水たまりができている

つま先立ちで

着地点を探しながら歩いても

下ろし立ての革靴には

どうしても泥水がついて

冷えきった車からは

エンジン音が低空を漂っていく

こういうときは、きつと

抱き合って泣くのだろう

ただ悲しみは捉えどころなく

嘆く母の肩も背中もずつと遠い
それぞれがシートに掛けて
黒いベルトを締めて
あてもなく外を見る

シャッター通りの商店街を過ぎ
白いガードレールが途切れた先から
山道へ入る

巨大な杉の木が
わたしたちを遠ざけようと
風の中でうなっている

茶色のシオルダーバッグも
帽子も ツイードのジャケットも
簡単に跡形もなく消えてしまった
人間のものらしい骨と
緑青色の固定具だけが残っている

祖母を焼いた煙は
冷たい雨にまぎれて追いかけてようもない

no pasarán

栗山佳織

プロペラの音が

映画のファーストシーンみたいに

遠くから近づいてくる

どうしようもないくらいの人でいっぱい

上を見ると

高いところで木々の梢が揺れている

隙間から夕空がのぞいて

ずっと息がしやすくなる

きょうは朝から気温が上がり

ひどく暑いから

シャツが背中に貼りついて

手のひらもべたべたする

ぺらぺらのチラシがふやけて

「反対」の文字がかすれてくる

スピーチがうまく聞こえない
ところどころで ことばが強風に
ヘリコプターにさらわれて
空白になる

短いコールとドラムにあわせて
小柄なおばあちゃんが
からだを左右に揺らしている
骨ばった手に持ったベージュのショッピングバッグも
リズムに乗って

お守りみたいに見えるのは
ちり紙やペットボトルやビニール袋といっしょに
思いもかけないような何かが
放りこまれているからなのか
鳴りやまないコールが
スピードをあげて

あつまった体温で空気が熱くなる

ことばとことばが重なって そのなかを
七月の夜風が吹き抜け ぐつと
クールダウン

ちがう国で戦ってきたことばを
火炎瓶のかわりに
東京のしらけた空にむかって投げつける
夕方から夜まで 声はやまないから
ペットボトルも空になっていく

スマートフォンフラッシュに驚いたのか
しろい大きな虫が
わたしたちの頭上を 風に乗れず
不格好に飛んでいく
怒りは飛んでいかない
時の力の前で
ぐずぐずとすわり続ける

冷静と無関心のはざま

戸張雅登

毒が撒かれたら 地下へ潜ろう

大地に実る作物を食らう家畜と人間

犯されていく身体と精神

毒は魚の体で濃縮されて 食卓に並べば
あなた方は気づかず 口にする

川に流された毒は 土壌に染み込み
地下水に魔の手を伸ばす

希望を胸に大空を仰いで見たら
不器用に飛ぶツバメを見た

左右で不均等な尾 矮小化した脳

毒が満ちた大気からは鳥も自由になれず

沈黙の春は近い

突然に開いたパンドラの箱は塞がれず
大地に毒は広がり続ける

人が恐竜と呼ばれる日

戸張雅登

村には戻るなど言われたけれど
僕らの豚は取り残されたままで

餌を待っているのか

野生に返って山野を駆けているのか

人のいなくなった村に 新聞は配達されず

空の牛乳瓶に雨水が垂れる

舗装道路はひび割れて 草が生い茂る

それを食べに来る鹿たち

最初の一頭は慎重だったに違いない

化石となった車の代わりに 風をきって走る鹿

親子で草を頬張る 捕食者のいない世界

田畑は山を下った猪に荒らされて

僕らの帰る場所などあるのだろうか
先祖が拓き維持してきた村が沈んでいく

森で人は何になるか

——マルグリット「光の帝国」に寄せて

戸張雅登

鼻を鳴らして 茂みをかきわけ

見つけたのは 流れ出した甘い蜜

絶え間なく湧き出る泉に 口を近づけ

すすってみれば 鼻から抜けるリンゴの香り

仄かな明かりさえ拒む森

温もり確かな重みを身体全部で受け止める

森の外では雨が大地に打ちつけ

嵐は木々を揺らし 葉を濡らそうとする

森の端の崖は崩れ そこを流れる雨水が

葉脈を浮かび上がらせる

だが 森の深部は静かだ

僕は 濡れた鼻と大地の体温
葉の触覚をもつて 黒い森を味わう

濡れた記憶

畑ゆめじ

アパートの前の 国道1号線

赤信号が車の流れをたち切ると

辺りは途端に 静かになって

わたしは記憶の波に飲み込まれる

あの日 とつぜん 大地が大きく揺れて

私たちの生活を 一瞬で崩し去り

そこに確かにいた人 あった物

全部を流してしまった

すべてを失って それでも生きている ということは 時に

死ぬより ずっと残酷で 恐ろしいのだ

あの日の夜は 闇が静寂を連れてきて

ただ 永遠のように 静かだった

わたしは今 歩みを始めたけれど
未だ 赤信号の静けさより 脆弱だ

こうもり

畑ゆめじ

昔 実家の屋根裏に こうもり が住んでいた
彼らはめったに姿を見せなかったが

深夜 家族が 寝静まり

高校生の 私が ひとり

何をするでもなく 夜更かししていると

家の中を飛び回る かれらの

羽音が よく 聞こえたものだった

活きる彼らを 一目 見てみたくて

ある夜 しんと暗い廊下で

私はひとり 膝を抱えて 息を潜めた

闇がじつとり 身体にまとわりつく

闇に飲み込まれる と思った

それもいい と思った

それでも 彼らは

私の心臓の 確かに動くのを見透かして
闇から闇へ

足早に 姿を消してしまった

そのまま廊下で 夜を見送った私に
窓から差し込む朝日は 眩しすぎて
私はとてもゆっくり
まばたきをした

小さいチーズに

畑ゆめじ

わたしの故郷には
デリバリーのピザがない
生まれてこのかた二十年
都会の食べ物だと思ってきた

この街に来て三年目の春
ついに昨日 大学で
デリバリーのピザを食べた

友人たちと 四つに分けたピザを
美味しい 美味しいと 唱えながら
一瞬で飲み込んだ

「これが無いなんて 田舎はもったいない」
私は首を縦に振って 小さく 笑った
ピザが詰め込まれていた箱には

滑り落ちたチーズが 冷たくなっていた

三人は その後も

話の続きを楽しんでいたが

わたしは 用事があると言って

足早に校門を出た

出て ようやく

特に用事などないと気づいた

次の一步を迷う私に

駅への下り坂は

いつもより 急だった

私は 勝手に踏み出す足で

坂を転がるように降りながら

あの 冷えた 小さいチーズを思っていた

寂しく笑う

渡辺信二

この村は 毒を喰らわば 皿までも
嘘つき 騙して ほくそ笑む

傍若無人タヌキの なんと 溢れていることか

でも 住民たちは カチカチ山を望まない
あれは おとぎ話だからと寂しく笑う
あの後日譚を知っていますか

おばあさんの墓参りしているおじいさんに
兎がやってきて 「仇を取りました」と
報告し 花を手向けました

すると おじいさんは
「なにかタヌキに気の毒だね」
そう言って 寂しく笑ったそうです

彼はもうあの日飲まされた
婆汁の味を忘れたでしょう

檸檬の裏話

——もとの智恵子が語る

渡辺信二

「あなた やつと来てくれた」

「ほら おまえの大好きな檸檬だ」

わたし だけど 噛り付かない

がりりだなんて 獣じみて下品です それよか

「何か怖い 何かいる」わたしがそう言う

「ただの隙間風さ ベッドで寝てばかりいるから

敏感になっっているんだ」 あなたはそうおっしゃって

病室の窓を閉め直して鍵を掛けました

あれは だけど ガラスなど軽々と通り抜けるのに

それから あなたは わたしの顔を覗き込みました

でも 口づけではありません ああ 表情は

どうしておまえの目が青くないのかと

詰なっていましたね ああ 一気に

わたし 呼吸が苦しい 機関が止まりそう

実際「ああ 止まりそう」と言いました

あなたは でも 看護婦さんと呼ばけません

わたしは あなたの手を掴んだけれど

あなたは「痛い」と手を解きました

「痛いのは あなたが生きてる証拠」

そう言葉にできず 咳き込んだなり

わたしは 確かに 止まった 止まりました

その時のあなたを 今でも覚えています

詩になると 内心 確信していましたね

きつと月命日には 檸檬を写真の前に飾るのでしよう

それでもわたし あなたが好きです

そう言えば 三途の川べりには

いろんな樹木のなかに 檸檬も植わっていました

あなたもきつと見ることでしよう

5月2日の夜に思う

——茨木のり子「6月」に答えて

渡辺信二

どこかに美しい街はないか——

ああ ありません なお不思議なことに

男も女も大きなジョッキをかたむけるのに

怒りも鋭い力もありません

せめて どこかに美しい村はないか——

実は今 どこでも P M 2・5の世界です

食べられる実をつけた街路樹を誰もが嫌い

萼色の夕暮れ 若者がマスク姿で 口数も少ない

この国は 言葉を言葉のままに生きるか——

この国は 歯に衣着せ 自分解釈で言葉を歪めます

聞く耳持たず

論理がないのに 韻文ありません

茨木のり子さん 否定形で答えるのは 残念ですが

どこにも 美しい人と人の力が働かず

同じ時代をともに生きる共感もない

15年5月の始まりでした

民は人であるか

渡辺信二

かつて 民は 例えれば 苗

苗が稲に育って

刈り取られ

束となつた稲藁を

片腕で抱え上げた姿が ム

ムを じぶんのものにするのなら

それが 私すること

無数のムを覆うものは

公となつた

今 多くの民が苗字を戴き

犬のごとくに

せめては たらふく飯をと 伏しねがう

貯えは 奥にしまつて

飲食慎む貧困生活

15. 03. 01から、15. 07. 17のあいだに贈られた詩誌・詩書一覧

『光芒』 75.

『タルタ』 33。

『のをあある』 2。

『万河・Banga』 13。

『きょうは詩人』 30。

『りんごの木』 39。

『金木犀』 17。

『光芒』 74。

『GANYMEDE』 63。

『ココア共和国』 17。

『のをあある』 1。

『奥の国』（ゲーリー・スナイダー、原成吉訳）思潮社、2015。



詩誌『立彩』第8号 2015年8月1日 頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3

フェリス女学院大学文学部英米文学科 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311